
烈火の騎士とチートな大将

十字架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

烈火の騎士とチートな大将

【Nコード】

N2869Q

【作者名】

十字架

【あらすじ】

これは烈火の騎士とかなりチートな大将の物語・・・

長編処女ですので感想とかを書いていただければ泣いて喜びます

プロローグ（前書き）

プロローグです

ブローグ

カタカタ・・・・・・・・

カタカタ・・・・・・・・

プルルル、プルルル

ガチャ

「はい」

「おお、ワシじゃ」

「またあんたか、今度は何の用だ？」

「ちよいと頼まれごと聞いて欲しいのじゃが・・・」

ガチャ・・・・・・・・

プルルル・・・

ガチャ

「はい」

「いきなり切らんでくれんかのう」

「あんたの頼みは口クでもない事ばかりだから出来れば聞きたくないのだが・・・」

「まあそう言わんでくれ、実はのお前さんに出向してほしい部署があるのじゃが・・・」

「断る」

「即答じゃのう・・・」

「当たり前だ、何で俺がそんなめんどくさい事をしなくちゃならんのだ」

「むう・・・」

「お前さん・・・予言は聞いとるか？」

「予言？・・・ああ騎士カリムのあれか」

「そうじゃ、そのことでお前さんには出向いてほしいのじゃが・・・ダメかの？」

「・・・何処の部隊だ」

「行ってくれるのか？」

「部署を聞くだけだ」

「機動六課と言う部署なのだが・・・」

「・・・あれだけエースを集めておいてまだ増やすつもりなのか・
・・・」

「まあ予言が予言じゃしもう、戦力が多いに越した事はないじゃ
ろ?」

「そんなことしなくても俺一人が出れば済む話だろ?」

「お前さんはミッドごと吹き飛ばすじやろう・・・」

「・・・まあ否定はしないが・・・」

「まあそういうことで出向してくれんか?」

「わかった、期限は?」

「試験運用が終わるまでじゃ」

「了解しました、現時刻を持ちまして機動六課に異動させてもら
いますよ、”ラルゴ・キール元帥殿”」

「うむ、よろしく頼むぞ、”青崎蒼也大将殿”」

ガチャ・・・

ふうめんどくさいことになったなあ
まあいいか久々にあいつにも会えることだしよしとするか
・・・怒ってるだろうなあ

プロローグ（後書き）

かなりの駄文ですが多めに見てやってください・・・

01 話（前書き）

本編です

01話

蒼「ふう、ここが機動六課か・・・新設なだけかなりきれいだな」

あのクソじいめ・・・次にあつたら絶対に殺す！

あの後、異動のために手続きをしようとした蒼也だが既に手続きは完了していていつでも出向できるようになっていたのだ

何が頼みを聞いてくれた！やらせるき満々じゃねえか！！

蒼「あーーーーー！！ムカツクーーーーー！！！！！！！！！！」

そのころ、部隊長室では・・・

「はやてちゃん、新人さんが来るのって今日ですよね？」

小さい妖精・・・もといユニゾンデバイスのリインフォース？
が主人である八神はやてに問いかける

は「そうやで、あのラルゴ元帥が直々に送ってくれた人やから信
頼できる人のはずや」

リ「その人の資料とかは無いのですか？」

は「あるにはあるんやけど・・・名前以外書かれてないんよ」

リ「名前以外・・・ですか？」

は「せや、やからちよつと不安やねんけど・・・」

リ「まあラルゴ元帥もミスくらいするんじゃないですか？」

は「せやな！あのじいちゃんも年やしな！」

リ「ですすー」

は「それじゃ、リイン、悪いねんけど隊長人呼んできてくれへんか？」

リ「了解ですー」

でも何かひっかかるんよね、嫌な予感と言つか何と言つか・・・

六課受付・・・

蒼「すみません、本日付け六課に配属になったものですが、部隊長室はどちらでしょうか？」

受付「それでしたら案内の者を呼びますので少々お待ちください」

蒼「わかりました」

さつさと挨拶して帰る・・・2秒くらいで・・・

受付「すみません、ただいま案内の者が手を離せない状況でして・・・もうしばらくお待ちください」

蒼 「あ、はい、わかりました」

ちつ、めんどくせえなあ

「あの・・・どうかなされましたか？」

オレンジの髪の少女が言う

蒼 「ああ実は本日付けで六課に配属された者でして、部隊長室まで案内してもらおうと思ったのですが、担当の人が忙しいらしく待ってるんですよ」

「それなら私が案内しましょうか？」

蒼 「む？いいですか？」

「はい、訓練も終わりましたから」

蒼 「それではお願いします」

テ 「はい！あ、それと私ティアナ・ランスター二等陸士であります！よろしくお願いします」

蒼 「自分は青崎蒼也と言います、よろしくお願いします」

そうか・・・この子がティータの・・・

テ 「どうかなされましたか？」

蒼 「いや、なんでもありませんよ」

テ 「そうですか、それでは案内させていただきます」

部隊長室前・・・・・・・・

テ 「失礼ます、本日付けで配属になった方をお連れしました」

は 「了解や、入ってきて構わへんよ」

テ 「はい、失礼します」

蒼 「失礼します」

は 「初めまして、機動六課にようこそ、部隊長の八神はやてと言います、よろしくお願いします」

蒼 「はい！本日付けで配属となった青崎蒼也です！よろしくお願いします！
いします！」

機動六課スターズ分隊隊長高町なのは一等空尉

機動六課ライティング分隊隊長フェイト・T・ハラウン執務官

機動六課スターズ分隊副隊長ヴィータ三等空尉

それぞれの自己紹介が終わり・・・

蒼 「そういえばライティング分隊には副隊長はいないのですか？」

は 「居るけど、ちょっと遅れてくるねん、そろそろくると思うん

やけど・・・」

シ 「失礼します、ライトニング分隊副隊長シグナム二等空尉、ただいま戻りました」

は 「おかえりシグナム、この子がライトニング分隊の副隊長や！」

シ 「む？誰だ？お前が新人か？」

は 「そうやねん、この人が本日付けで出航してくてくれた人や」

シ 「そうでしたか、おい、お前、顔を見せろ」

蒼 「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

シ 「どうした？聞こえなかったのか？顔を見せろと言っている」

蒼 「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

シ 「おい！貴様！！いい加減・・・に・・・」

は 「どうしたんや？シグナム？」

シ 「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

は 「シグナム？」

シ 「し・・・・・・・・失礼しました！！！！！！！！！！」

は 「ちょ、シグナムいきなりどうしたん?!」

フ 「そうですよ、いきなり謝ったりして・・・」

シ 「お・・・お久しぶりです・・・」 蒼崎蒼也大将殿」

「「「え?えええええええええ」」」

蒼 「久しぶりだな、シグナム」

シ 「はい・・・お久しぶりです・・・」

蒼 「さて、挨拶も済んだことだし・・・シグナム?」

シ 「はいいい!」

蒼 「後で俺の部屋に来ようか?」ニコニコ

シ 「え・・・遠慮させ「出来ると?」喜んで伺わせてもらいます」

「「「「「あのシグナムが一方的に負けた!!」」」」

蒼 「さて、一応改めて名乗っておこうか、時空管理局本局特別殲滅部隊部隊長兼大将の青崎蒼也だ、よろしく」

は 「殲滅部隊の部隊長つて言うたらあの”鬼神”とか”破壊神”と呼ばれてるあの殲滅部隊長ですか?」

シ 「他には”人間核爆弾””チート””人外”などと呼ばれてい
るあの部隊長です」

蒼 「うん、解説ありがとう、シグナム……後で覚悟しとけや・
・・」

「ヒッ！すみませんでした！！！！！！」

「失礼ですがうちのシグナムとどういうご関係で……？」

「ん？何だ聞いてないのか？」

「何も聞いてませんか……」

蒼 「はあ・・・まあいいだろ、仕事でいうなら元上司と部下、プライベートで言うなら・・・」

「言うなら……」ゴクッ

蒼 「彼氏、彼女だ」

「はい？」

「だから付き合ってるんだって」

[illegible]

「
「
「
「
ええええええええ
「
「
「
「

これが六課メンバーとの出会いだった……

01話（後書き）

次回！模擬戦シーンを書きます！！うまく書けるかな？・・・

02話（前書き）

もしかしたら戦闘しないかも・・・

02話

は 「まさかシグナムに恋人が居ったなんて・・・」

フ 「しかも大将・・・」

な 「ちょっと、いや、かなり以外だったよね・・・」

ヴ 「ああ、まだ信じらんねえ・・・」

シ 「安心しろヴィータ、私も最初は信じられなかった・・・」

は 「どういう経緯でシグナムと・・・そのお付き合いされたか伺っても？」

蒼 「ああ、構わんよ、それと敬語じゃなくていい、八神、高町、テストロッサは俺と同じ年だ」

は 「そうでしたか・・・ってええええええええ」

フ 「う・・・嘘・・・私達と同じ年で大将・・・」

な 「入局はいつしたんですか？」

蒼 「ん？5年前だが？」

は 「5年で大将まで昇り詰めるなんて・・・あんためちやくちや
や・・・」

蒼 「そりゃ一人でSSランクの任務を100%でこなしてるんだ
から当然だろ？」

は 「はい？」

フ 「はい？」

な 「はい？」

蒼 「だから、一人でSSランクの任務をしてきたんだから当然だ
ろ」

は 「えっと・・・魔導師ランクはいつたいいくらなんや？」

蒼 「EXだが？」

「「「「E、EXウウウウウ」「」「」

は 「ってどんなランクやったっけ？」

フ 「はやて・・・それくらい覚えておこつよ・・・」

な 「EXは測定不能者に付けられるランクだよ」

蒼 「正解だ、さすがは教導官と執務官だな」

は 「正確にはどのくらいで・・・？」

蒼 「そうだな・・・確かここで一番魔力量の多いのは高町だったな？」

な 「はい、そうです」

蒼 「そつだな、ざつと高町の500倍つて所か」

ヴ 「な?!」

は 「嘘やろ・・・」

蒼 「残念ながら事実だ」

フ 「でもいまいち実感がわかないと言つか・・・」

蒼 「なら模擬戦でもするか？」

シ 「!」

は 「どないしたん？シグナム？」

シ 「蒼也・・・本気で言っているのか・・・？」

蒼 「おう、それに”あそこ”に行けば問題ないだろ」

シ 「確かにあそこならば問題ないが・・・しかし」

蒼 「いいじゃねえか、元々俺が教導に来た時点でお前たちに未来はない!!」

シ 「嘘だ!!」

蒼 「本当だ!!」

シ 「OTL」

蒼 「まあ今回は諦めな、シグナム」

シ 「主・・・」

は 「今度はどないしたん？シグナム？」

シ 「長い間お世話になりました・・・ただいまを持ちまして旅に出させて「待ちいいいい」主・・・」

は 「そんなこと許さへんで!」

フ 「そうだよ！シグナム！！」

シ 「み・・・みんな・・・」

は 「シグナム一人逃げようたってあかんで！シグナムも道連れや
！！」

シ 「な！主！！それだけは許してください！！」

は 「あかん！シグナムも騎士やったら覚悟決め！！」

シ 「主・・・わかりました、私もこの男を倒すために死力を尽く
しましょう！！」

蒼 「ほう、いい度胸じゃねえか、シグナム・・・」

シ 「今日こそは倒してみせる！！」

蒼 「なら決まりだな、隊長人＆フォワードVS俺で派手にやらか
そうじゃねえか！！」

隊舎ロビーにて……………

ス 「新しく来る人ってどんな人かな？ティア」

青髪の少女、スバルが聞くと

テ 「いい人だったわよ、礼儀正しいし、でもひ弱そうな体つきだったから事務員でしょ？」

ス 「そうなんだ、面白い人だといいね」

エ 「そうですね」

赤髪の少年、エリオが答える

キ 「あ、きましたよ」

ピンクの髪の少女、キャロが知らせる

な 「みんな揃ってるね」

「「「はい!」「」「」

フ 「突然だけど新しく入った人と模擬戦することになったからみんな準備しようか?」

テ 「あの人戦えるんですか?」

ス 「ティアから聞いた話だとひ弱そうだったと聞きましたか?」

蒼 「俺はそんなふうに見られてたのか・・・」

テ 「あ、青崎さん」

蒼 「ふむ、まずは自己紹介からでしょうか」

テ 「ティアナ・ランスター二等陸士であります!」

ス 「スバル・ナカジマ二等陸士であります!!」

エ 「エリオ・モンディアル三等陸士であります!!」

キ 「キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります!」

蒼 「時空管理局本局特別殲滅部隊部隊長兼大将の青崎蒼也だ、よろしくな」

テ 「え?」

蒼 「ん?どうした?ランスター」

テ 「さ・・・先程は申し訳ありませんでした!!上官とは知らずあのような態度を・・・」

蒼 「ああ、かまわんさ、俺はそんなことを気にしないから」

テ 「ありがとうございます!」

な 「さて、自己紹介も済んだしみんな訓練所に行こうか」

蒼 「ああ、その必要はない」

な 「どういうこと？青崎君？」

蒼 「俺が誰もいない世界に全員転移させるからだ」

フ 「そんなことしなくても・・・」

シ 「いや、是非そうしてくれ」

フ 「シグナム？」

シ 「そうでもしないとミッドが一瞬で焼け野原だ」

「」「」「はい？」「」「」

蒼 「まあそういうことだ、んじゃ行くぞ」

パチンッ

蒼 「着いたぞ」

な 「ここは？」

蒼 「俺が作った空間で他の世界との狭間にある空間だ」

テ 「な・・・そんなことが普通の人間にできるわけ・・・」

蒼 「出来るんだから仕方ない」

シ 「そういうことだ、皆準備はいいか？」

隊長人、フォワードがセットアップがすんで・・・

フ 「蒼也も早くセットアップしなよ」

蒼 「必要ない」

フ 「私達を馬鹿にしてるの？」

シ 「違うぞ、テストロッサ、蒼也がセットアップをすれば我々はその瞬間に魔力に押し潰されてしまうから奴はしないんだ」

フ 「なるほど、まさかそこまでだったなんて・・・」

蒼 「まあそういうことだ、ルールを説明するぞ、お前達の勝利条件は俺を一步でもここから動かせばいい、俺の勝利条件はお前達全員の戦闘不能だ、わかったか？」

な 「うん、わかったよ」

蒼 「それじゃあ始めるぞ」

蒼 「レディ・・・ゴー！」

02話（後書き）

予想通り戦闘しなかった・・・次こそは！！

03 話（前書き）

やっと戦闘が出来る・・・

03話

先ずはなのは、ティアナによるクロスファイアの弾幕、そして打ち終わり直ぐにエリオ、スバル、フリードによる打撃と砲撃、そしてシグナム、フェイト、ヴィータによる斬撃と打撃、そして最後になのは、はやてによる特大砲撃・・・

みんなこれで終わったと確信していた・・・一人を除いて・・・

蒼 「何だ・・・この程度か？」

フ 「ありえないね・・・あれだけの攻撃で擦り傷1つ無いなんて・・・」

な 「B」なしに防ぎきるほどの魔力・・・さっきの話もあながち嘘じゃないね」

テ 「本当にあの人は人間ですか・・・？」

シ 「ああ間違いなく人間だ・・・そしてやはり無傷か・・・今回は我々の負けだ・・・」

ス 「どういふことですか？」

蒼 「こういう事だ・・・」

は 「なんちゅう魔力や・・・」

キ 「フリードが怯えてる・・・」

蒼 「全員落ちろ！！ 千の雷 ！！！！！！！！！！」

その瞬間・・・立っていたのは蒼也だけだった・・・

蒼 「・・・・・・・・やりすぎたか？」

蒼 「とりあえず回復魔法かけとくか リザレクション ！！」

シ 「ん・・・」

蒼 「起きたのはシグナムだけか」

シ 「みたいだな・・・しかし・・・やりすぎだ・・・」

蒼 「やっぱりそう思うか？」

シ 「ああ戻ったらたっぷり説教だ」

蒼 「断る！」

シ 「逃げたらもう面倒見てやらんからな」

蒼 「グツ！それは卑怯だぞ！！」

シ 「なんとも言え！一撃で終わらせたせいで欲求不満なんだ！
！」

蒼 「何だ、そんなことか」

シ 「そんなこととはなんだ！」

蒼 「シグナム・・・」

シ 「そうだな」

蒼 「んじゃ」

パチンッ

蒼 「戻ってきたぞ」

シ 「だな、問題はどつやって皆を部屋に運ぶかだが・・・」

蒼 「それなら問題無い」

シ 「何故だ？」

蒼 「とつくに全員起きてるからだ」

シ 「は？」

は 「い、いや・・・バレてた？」

蒼 「バレバレだ、そして念話で寝たフリするように言ってたのもな」

は 「あははゝ」

蒼 「八神よ・・・」

は 「な・・・なんですよ？」

蒼 「お前だけでもう一度あの世界に行くか？」

は 「申し訳ありませんでした！！！！」

蒼 「わかればいい、それでは今日はシグナムを借りていくぞ」

は 「あ、はい、どうぞ」

蒼 「うむ、それじゃあ行くぞシグナム」

シ 「ああ、それでは主、皆また明日」

「はい、お疲れ様です」

「 「 「 「 「 「 「 お疲れ様です! 」 」 」 」 」 」 」

03話（後書き）

かなり短いですが戦闘シーン書きました！
あれですね下手くそ通り越してゴミですね・・・

04 話（前書き）

ザウザンドステージです

04話

シ 「ん・・・朝か」

ふと目が覚め隣を見ると・・・

蒼 「すーすー」

シ 「こうして見ると可愛いのだがな」

蒼 「ん・・・シグナム・・・すー」

シ 「ん？何だ、寝言か」

蒼 「ふ・・・と・・・」

バキッ

蒼 「何だ?! 敵襲か?!」

シ 「おはよう、蒼也」

蒼 「おはよう、シグナム。ところで何故俺は殴られたのだ？」

シ 「乙女に言うてはならないことを言おうとしたからだ」

蒼 「？」

シ 「まあいい、起きたなら行くぞ」

蒼 「ん、あいよ」

六課・・・・・・・・・・

シ 「おはようございます主はやて」

は 「お、おはようございますシグナム」

シ 「どうかなされましたか？」

は 「いや、なんでもないよ！」

シ 「そうですか？つとほら挨拶しないか」

蒼 「ん。ああよう八神」

は 「おはようさん、蒼也君」

蒼 「で、朝っぱらから呼び出しで何の用だ？」

は 「実はな、出張任務に行くことになったからそのお知らせや」

シ 「出張任務ですか？」

は 「せや。六課の隊長人&フォワードで行くんや」

蒼 「で、場所は？」

は 「それは後でのお楽しみや！」

シ 「わかりました、それでは早速準備してまいります」

は 「ん、よろしくな」

そして六課前………

ス 「出張任務って何処に行くのかな？」

テ 「私^が知るわけないでしょ」

は 「みんな集まってるか？」

な 「うん、全員いるよ」

は 「そか。それでは出張任務の行き先を発表したいと思います！」

フ 「そういえばどこに行くの？」

は 「聞いて驚きなや？行き先はなんと！！第97管理外世界地球の海鳴市や！！」

な 「え？！本当？！はやてちゃん？！」

フ 「久々の里帰りが任務かあ、でも嬉しいな」

は 「という訳で、現地の民間協力者に連絡をとり、転送ポートの準備をします！」

「「「「「了解!」「」「」」」」

蒼 「（地球か・・・それも海鳴市・・・まさか協力者って言うのはあいつじゃないだろうな・・・）」

へりの中・・・

キ 「第97管理外世界文化レベルB・・・」

テ 「魔法文化無し、次元移動手段無し・・・って、魔法文化無いの!？」

蒼 「無いぞ」

テ

「いや・・・なんでそんな世界から、なのはさんや八神部隊長みたいなオーバーSランク魔導士が・・・」

は 「偶々やろ?」

な 「だよね?私もユーノ君と出会わなかったら魔法何て知らなかったと思うし・・・」

テ 「偶々って・・・そんな理由でオーバーSランクの魔導師が・・・」

ス 「そつえば蒼也さんの名前もなのはさん達に似てますよね?」

蒼 「ん?そりゃそうだろ、俺も地球出身だから」

な 「え！？そうだったの？」

蒼 「言ってなかったか？」

フ 「聞いてないよ・・・」

蒼 「ってか名前で気付けよ・・・」

は 「はははゝもしかして思ってたけどまさかほんまやったとは」

蒼 「まあそういうことだ」

な 「もしかして海鳴出身？」

蒼 「・・・・・・・・さあな」

な 「？」

海鳴・・・・・・・・

は 「着いたでー！」

な 「久し振りの海鳴だよ！」

フ 「だね」

蒼 「・・・・・・・・」

シ 「どうした？蒼也？」

蒼 「いや。なんでもない、ところで民間協力者って誰なんだ？」

は 「それは・・・」

ア 「はやてー！」

は 「アリサちゃん！」

ア 「久しぶりねなのは、フェイト、はやて」

な 「そうだね！すっごく久しぶりだよ！」

ア 「ところでその男は誰？」

蒼 「・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ア 「ちよつとアンタ！自己紹介ぐらいしたらどうよ？」

蒼 「・・・・・・・・蒼也だ・・・・・・・・」

ア 「蒼也？・・・・・・・・！！アンタ・・・・・・・・まさか・・・・・・・・」

蒼 「久しぶりだな、バーニング」

ア 「バーニングスよ！そう、あなたも魔導師だったのね・・・」

蒼 「まあそういうことだ」

は 「アリサちゃんと知り合いなんか？」

蒼 「前に地球に遊びに来たときに誘拐されてるのを見かけてな、その時に助けたのが俺だったわけだ」

な 「そうだったんだ・・・」

は 「無事で何よりやったわ」

蒼 「そんなことはどうでもいいからさっさと探索を始めるぞ」

は 「了解や！それじゃスターズ、ライティング分隊で別れて探索しよか」

蒼 「俺はどうすればいい？」

は 「そつやな・・・蒼也君の好きにしてええよ」

蒼 「そうか、なら適当に歩かせてもらっ」

は 「わかった、なら集合時間には戻ってきてな」

蒼 「わかった」

は 「なら解散や！」

04話（後書き）

次回に続きます・・・

05話

蒼 「それにしても久し振りの地球だな・・・」

「マスター」

蒼 「何だ？」

「そろそろ私出てきてもいい？」

蒼 「そうだな、あいつらも居ないことだし、別にかまわんぞ」

「ふう、いくら私が小さいからずっとポケットの中は窮屈だったよ！」

蒼 「すまん、後でケーキなりアイスなり買ってやるから機嫌直せ」

「本当?!ならモンブランが食べたいよ!!」

蒼 「なら後で誰かにおいしいケーキ屋を聞いてみるからそれまではじっとしててくれよ?ジユデイ」

ジユ 「まっかせなさい!」

蒼 「んじゃ適当に聞いてみますか」

蒼 「(聞こえるか?高町?)」

な 「（聞こえてますよ？問題でもありましたか？）」

蒼 「（いや、この街でオススメのケーキ屋ってあるか？）」

な 「（ケーキ屋・・・ですか？それならありますけど）」

蒼 「（それなら教えてくれないか？）」

な 「（わかりました、それじゃ地図を送りますね）」

蒼 「（ああ、すまん）」

な 「（いえ、構いませんよ、それじゃまた後で）」

蒼 「（ああ、後でな）」

蒼 「ふむ、翡翠屋と言うのか、ここからだ結構近いな」

ジュ 「ケーキ屋さんあった？」

蒼 「ああ、この近くだから早速行ってみるか」

ジュ 「れつつこー！」

カランカラン

「いらつしやいませ、何名様ですか？」

蒼 「一人だ、知り合いにここのケーキが旨いと聞いてきたんだが」

桃 「そうなんですか？それは嬉しいですね」

蒼 「やっぱり紹介されるって言うのは嬉しいものなんですネ」

桃 「それはそうですよ、職人としてはそれだけ認められていると言つことですから！」

蒼 「なるほど、そういう捉え方もありますね」

桃 「所で誰の紹介でいらしたんですか？」

蒼 「ああそれは・・・」

な 「ただいまー！」

桃 「あら、おかえり、なのは」

な 「うん！久しぶりお母さん！！」

桃 「後ろの子たちは？」

な 「私の教え子だよ！」

テ 「ティアナ・ランスターです！」

ス 「スバル・ナカジマです！」

桃 「どうも初めまして、なのはの母の桃子です」

な 「所でお母さん、お父さんは？」

桃 「士郎さんならさつき休憩に入ったわ、呼んでくるわね！」

な 「うん、お願い、お母さん」

蒼 「仲いいんだな」

な 「はい！自慢のお母さんです！」

蒼 「そうか、大事にしろよ」

な 「はい……って青崎さん？！いつの間に……」

蒼 「お前たちが来る前からだ」

な 「そうでしたか、全く気付きませんでした」

蒼 「まあいいが、それにしてもまさか実家がケーキ屋だったとはな」

な 「結構評判いいんですよ？観光マップにも乗ってますし」

蒼 「ほう」

士 「なのは！」

な 「お父さん！」

士 「久しぶりだねえ、暫く見ないうちにまた美人になって・・・」

な 「もうっ！みんなの前でやめてよ！！」

士 「恥ずかしがることはないさ、なあ蒼也？」

蒼 「そうだな、顔は悪くないし面倒みもなかなかいいみたいだし
な、士郎もこんな娘がいると鼻が高いだろ？」

士 「当たり前じゃないか」

な 「お父さん」

士 「なんだい？」

な 「青崎さんと知り合いなの？」

士 「ああ、そのことが、なに、昔ちよつと殺し合った仲だよ」

な 「ちよ、お父さんと蒼也さんが？！何で?????!?!?!」

士 「ボディガードの仕事中にね、敵と間違えて斬りかかったやつ
たんだよねえ」

蒼 「ああ、あの時は流石にびつくりしたぞ」

な 「何で敵と間違われたんですか？」

蒼 「観光してたら現場に迷い込んだ とりあえずそのまま観光した 犯人グループの一人と間違えられた ボコった、以上！！！」

な 「いやいや！端折りすぎですって！！って言うか誰をボコったの？！」

士・蒼 「私だね（こいつだ）」

な 「お父さんをボコっちゃったの？！」

蒼 「いきなり斬りかかってくるから悪い、俺は悪くない！！！」

士 「しかしあそこまで一方的にやられるとは思ってもいなかったよ」

蒼 「あれぐらい出来ないドラゴンとかと死合ったら即死だぞ？」

士 「私は人間相手だからねえ」

蒼 「まあこの話はどうでもいい、ケーキをくれないか？」

士 「ケーキかい？何がいいのかな？」

蒼 「モンブランとショートケーキ、それとチーズケーキを二つずつくれ」

士 「わかった、シュークリームもオマケしておこう」

蒼 「すまん、いくらだ？」

士 「お金はいいよ、あの時の詫びだと思ってくれ」

蒼 「そうか・・・だが断る!!」

士 「却下だよ」

蒼 「くっ、ならば!!」

士 「どうするつもりだい？」

蒼 「美由紀ー!!」

美 「誰か呼んだ？って青也さん?!来てたんならもつと早く呼んでくださいよ!」

蒼 「すまん、ほれ小遣いをやろう」

美 「えっ?いいんですか?!有難う御座います!!」

士 「!!その手があったか・・・」

美 「何の話ですか？」

蒼 「このケーキ代を士郎が受け取ろうとしなかったんでな、それなら美由紀にやろうと思ったただだよ」

美 「なるほど、ならこれはレジに入れておけばいいんですね？」

蒼 「ああ、レジに入れるなり財布に入れるなり好きにしろ」

美 「ふふっ、レジに入れておきますよ」

蒼 「それじゃ俺はここで失礼する、またな士郎、美由紀」

士 「ああ、いつでも来なさい」

美 「今度はもっとゆっくりして行って下さいね」

蒼 「そうさせてもらおう、高町達もまた後でな」

な 「はい、また」

テ 「また一人でブラブラするんですか？」

蒼 「ああ、ゆっくりしたいしな」

ス 「それじゃ集合時間に会いましょう!」

蒼 「おう、んじゃな」

05話（後書き）

デバイス登場させてみました！！

話から分かった人もいるかも知れませんが何デバイスかはまだ秘密です・・・w

次回に続きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2869q/>

烈火の騎士とチートな大将

2011年10月8日14時35分発行